日本チェンバロ協会
Japan Harpsichord Society

5

2015年11月

総会報告

第４回通常総会

2015年5月9日、松本記念音楽迎賓館にて第4回通常総会が行われました。
2014年度の活動報告、2015年度の予算案・事業計画等の各議案が審議され、それぞれ承認されました。
今後、久保田慶一新会長のもと、17名の新しい運営委員を中心に、新規事業を含む様々な活動を行ってまいります。
協会の活動充実のため、今後とも、会員の皆様のご支援・ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

2015 年度 運営委員

会長：久保田慶一　　副会長：大塚直哉
運営委員：秋山裕子、伊藤一人、上尾直毅、及川れいね、大塚直哉、岡田龍之介、加久間朋子、加屋野木山、乗形亜樹子
高橋ナツコ、土居瑞穂、長久真実子、坂由理、平野智美、宮崎賀乃子、森洋子、山縣万里（以上 17 名）

新会長就任

日本チェンバロ協会会長選挙（4月1日開票）は、下記の通り、候補者久保田慶一氏に対する信任多数となりました。
この結果を受け、久保田氏は5月9日の総会において会長に就任しました。
投票総数（正会員のみ）：72　　うち有効投票数：69　　信任：67　　不信任：1　　白票：1

ごあいさつ

　このたび会長をお引き受けすることになりました。私は演奏家ではなく、音楽史の研究者ですので、このような役職にはふさわしくないかもしれません。しかし任期中は協会の発展に貢献できるよう微力ながら尽力するつもりです。会員諸氏の方々にもご協力いただきますよう、よろしくお願いいたします。
　平成２７年度の総会で今年度の予算案が承認されました。その中に「年報の発行」と記載され、予算化されております。協会の活動として「チェンバロの日」や研究会の開催、会報の発行などが、これまでも活発に行われておりますが、協会活動の記録、会員の研究成果の公表、社会に対する啓蒙活動などを推進するためには、「年報」のような形で定期刊行物を発行することがぜひとも必要でしょう。
　私のこれまでの研究活動を通じて、年報の発行という課題に対しては、何らかの貢献ができるのではないかと思い、会長職をお引き受けしました。もちろんその他の仕事もいたしますが、私の任期中の最重要課題として、運営委員会などと相談しながら、発行に向けての道筋を整備したいと思っております。また皆さんからの忌憚のないご意見やご希望も、お待ちしております。何卒よろしくお願いいたします。

久保田　慶一

久保田慶一（くぼたけいいち）

東京芸術大学音楽学部、同大学大学院修士課程を修了。
1999年、東京芸術大学より「博士（音楽学）」を授与。
ドイツ学術交流会の奨学生として、ドイツ連邦共和国のフライブルク大学、
ハンブルク大学、ベルリン自由大学に留学。東京学芸大学教授を経て、
現在、国立音楽大学理事・副学長。
著書に「C.P.E.バッハ―改訂と編曲」「バッハの四兄弟」（音楽之友社）、
「バッハキーワード事典」（春秋社）、「エマヌエル・バッハ」(東京書籍)、
「音楽とキャリア」（スタイルノート）、「モーツァルト家のキャリア教育」
「音楽用語ものしり事典」（アルテスパブリッシング）、
「西洋音楽史 100 エピソード」「音楽再発見１００エピソード」（教育芸術社）、
「孤高のピアニスト―梶原完」（ショパン）、
編著書に、「はじめての音楽史」（音楽之友社）、
「キーワード 150 音楽通論」（アルテスパブリッシング）がある。
また翻訳書には「楽譜を読むチカラ」（音楽之友社）、
「モーツァルト殺人法廷」（春秋社）などがある。

チェンバロの日！２０１５

ソロ楽器としてだけでなく、アンサンブル楽器としての魅力に光を当てた今年の「チェンバロの日！２０１５」。
お天気にも恵まれ、２日間でのべ 155 人のお客様をお迎えしました。

5/9　Aホール

朝からこのホ-ルでは午後からの演奏会とリハーサルの為に調律及びセッティングが始まる。
楽器は２台用意。１台はこの館の所有する安達正浩氏作のフレンチ２段鍵盤で、もう１台は２年前に亡くなった製作家・柴田雄康氏による17世紀タイプのイタリアン。木目が大変印象に残る楽器である。
12:30に開館するや予想を超えるお客様がお集まりになり、このAホールも、開場するとあっという間に多くのお客様によって席が埋められていった。
この催し物の最初を飾る演奏会が13:00から始まる。演奏は『Duo Maris』。声楽の望月万里亜さんチェンバロの山縣万里さんによるデュオであり、初期イタリアのアンサンブル作品とチェンバロ・ソロの作品を、イタリアン・チェンバロを使用して演奏。この日のみの特別プログラムも用意され、お客様のリラックスして楽しんでいる顔がそこかしこにみられ、スタッフとしても手応えを感じた幕開けであった。
お客様に他の会場での催しをご案内の後、Aホールは次のコンサートの準備へ入る。この間はクローズ。
15:00開始の上尾直毅氏によるコンサートは、さらに多くのお客様がおみえになり、補助椅子を楽器の後ろにも置いて行われた。熱気あふれる会場内で繰り広げられた、イタリアンとフレンチ両タイプのチェンバロを使用した熱演と軽妙なお話。あっという間に45分が過ぎたように感じた。
演奏終了後、次のリハーサルが始まるまで楽器にご興味がある方には、少しではあるが部屋を開放。お客様は、調律のことや楽器の違いについてなどの質問をしながら、楽器と触れ合っていた。　（加久間朋子）

5/9　Bホール

初日の２番目のコンサート（チェンバロ鷲崎美和さん・バロック・ヴァイオリン佐藤泉さん）はBホール14時から。50部用意したプログラムが１部も残さずなくなりました。これ以上お客様が見えたらプログラムはコピー、席は立ち見という、まさに「これ以上はない」という大盛況。
期待が高まるなか、上品な緑系、ピンク系の衣装の二人が登場。対照的な色でありながら色の明るさと鮮やかさが揃った衣装はまるで異種楽器のアンサンブルを象徴しているようです。
プログラムは２つの「対照」を際立たせたものでした。一つ目はJ.S.バッハのロ短調と、その息子C.P.E.バッハのロ短調の意味するところがいかに異なるかという点。そしてもう一つは、C.P.E.バッハのソナタにおけるチェンバロとヴァイオリンを革命を目前にした新しい時代の精神とそれ以前の精神との対比としてとらえた点。
２つの曲間にこのような演奏意図を分かりやすく語ってくれたヴァイオリニストの佐藤さんのおかげで、C.P.E.バッハの音楽への新しい視点を持つことができ、また、子どもが親の理解をこえていくことへの諦観も持つことができる。１粒で２度おいしいコンサートでした。　（H.A）

5/9　特別講座（レセプションルーム）

16時から、昨年10月に亡くなった有数のチェンバロ製作家にしてリコーダー奏者、柴田雄康さんを偲んで企画されたレクチャー・コンサート。

前半は、彼が終世強い関心を寄せていたフレミッシュ・タイプのチェンバロについてのレクチャーで、彼が製作に関心を持つきっかけを作った師とも友人とも言うべき野村満男氏が、オリジナル・フレミッシュ・チェンバロの特徴、個性を詳述、私たちが漠然と抱いている同タイプの楽器イメージを明確にする画期的な内容で、その合間に挟まれる柴田さんに関するエピソード、思い出話同様、満場の参会者の並々ならぬ関心を集めていた。時間の関係で予定されていた内容の一部を割愛しなければならなかったのが残念であったが、チェンバロ協会ならではの講演となったように感じた次第。

後半は柴田さんの製作された2台のフレミッシュ・ラヴァルマン・タイプの楽器を用いてまず、渡邊順生氏によるソロで L.クープランの作品、次いで昨年の山梨国際古楽コンクールで優勝した中川岳氏のソロでバッハの作品が演奏され、最後にお二人のデュオでバッハの《協奏曲ハ長調》BWV1061aが演奏され、名器2台の豊かな響きが会場を満たし、この講座を締め括るに相応しい演奏内容となった。　（岡田龍之介）

5/9　Cホール

メンテナンス講座（13:10-14:00）は、アトリエ響樹の加屋野木山氏が、自身が実演しながら撮影された動画をプロジェクターで映しながら、プレクトラム（ツメ）が折れた場合の交換方法、ツメの削り方、弦のループの作り方、弦の張り方などを解説。詳しい工具の使い方やツメの形状と音色の違いなど、気が付きそうで気が付かない実用的な情報がたくさん盛り込まれていました。例えばヴォイシングナイフの刃の先端は繊細な作業に使うためにとっておき、ツメの長さを調節するために切るような大雑把な作業は刃の真ん中を使う、というのは、刃の切れ味を保つための知恵だということです。

調律講座（15:10-16:00）は、ギタルラ社東京古典楽器センターの佐藤俊二氏が、ギリシャ時代・中世・ルネサンス・バロック各時代の調律方法の特徴を、歴史に沿って解説。また、周波数とセント値の違い、調律図の見方、コンマの割り振り方など、少々専門的なことも丁寧に説明されていました。最後に「調律」の言葉の定義について触れられ、Tuningの「音を合わせること」Temperamentの「音を意図的にずらすこと」、この2つの意味が合わさって「調律」という言葉になったというお話に、参加者は深く納得した様子でした。　（X）

5/10　Aホール

13時からは中田聖子氏＆井上佳代氏による『イタリアへの憧憬』。
会場には沢山のお客様がいらっしゃり、コンサートへの期待感と共にお二方が入場され、A.コレッリ、F.マンチーニ、B.ストラーチェ、B.マンチーニ、そしてアンコールはヴィヴァルディと、45分の中にイタリアの音楽をリコーダーとチェンバロの音色の織りなす調べと共に、アンサンブルの魅力とB.ストラーチェのチェンバロ独奏と、チェンバロの魅力を柴田雄康氏製作イタリアンにより堪能できる時間を過ごす事が出来ました。

そして15時からは古賀裕子氏による『フォルクレのポートレイト』。
午後の日差しをステンドグラスの光を受けながら安達正浩氏製作タスカンを前に、開演を沢山の聴衆が心待ちにしているのが伝わってきました。
古賀裕子氏による曲目解説での一部をご紹介させて頂きますと「ヴェルサイユ宮殿でのいろいろな音楽家の人物像を弾いていると200年以上前の様子が映像のように感じられる面白さがあります」とあります通り、A.フォルクレの作品やF.クープ

ランの書いた《フォルクレ》を拝聴させて頂くと、私たち聴衆も45分という短い時間の中で次々とその魅力の中に弾きこまれ、ずっしりとフォルクレという作曲家の魅力とチェンバロという楽器の素晴らしさに魅了された午後となりました。
その後、Aホールでは試奏タイムになりました。
Aホールだけでも2種類のチェンバロを使用したコンサートを堪能させて頂き、アンサンブル、ソロと他の会場でも多くの楽器やそれぞれの調律方法による楽器の演奏を聴ける機会を頂けた私たちにとってチェンバロの醍醐味を味わう楽しい時間となり、チェンバロ協会主催のイベントに大変、感謝しております。

会場には演奏会などでお見かけする演奏家の方々が沢山いらっしゃって受付をされたり椅子を運んだり、会場整備にご奮闘されているお姿をお見かけいたしました。他にも我々聴衆の見えない所での沢山のご配慮があった事と想像しております。こうしてチェンバロの日を堪能させて頂き心から御礼申し上げます。ありがとうございました。（Y）

5/10　Bホール

フリーコンサート
２日目午前中に行われたフリーコンサートには、７組９名の愛好家及び学生の方が参加され、日頃の練習の成果を披露した。リハーサルなしの悪条件にもかかわらず、難曲に果敢に挑み、立派に演奏されていた。また、選曲に偏りがなく、愛好家の方の興味の広がりを改めて感じた。
お互いに学びあい、高めあうことができるフリーコンサート。これからも小さい方からご年配の方まで、また初心者から玄人はだしの方まで、多くの方にご参加いただきたい。（I）
加久間氏、寺村氏による2台チェンバロのコンサートでは、お2人の息の合った演奏と、2台ならではの厚みある音響を楽しませていただきました。
マクレーンやミューテルといった国外でもなかなか聴くことのできないレパートリーと、ギター五重奏曲を2台チェンバロ用に編曲したボッケリーニの《序奏とファンダンゴ》という新しい発見に富んだプログラムでした。
上薗氏による『フローベルガーの世界』では、バロック時代における組曲の規範を作り上げた作曲家の魅力を存分に堪能いたしました。 組曲はもちろん、即興性の高いトッカータ、模倣様式で書かれたリチェルカーレ、自由なインスピレーションが感じられるカプリッチョ、私的で情緒豊かな哀悼曲といった多彩な作品たちが、様々な演奏効果とアイディアがちりばめられた演奏によって色とりどりの宝石のように輝いていました。
（佐藤理州）

5/10　Cホール

紙クラフト講座（10日12:30-14:00）は、午前中フリーコンサートに参加された方が早くから集まり始めたため、予定を繰り上げて11時30分ごろに開場。久保田チェンバロ工房の久保田みずき氏とスタッフ2名が担当し、約20名の参加者が順次、紙クラフトのミニチュア楽器製作に挑戦しました。工房作のクラフト用紙（チェンバロとイタリアンヴァージナルの2種類）をハサミで切ったり糊で貼ったりして形を作った後、様々な模様のマスキングテープで装飾し、各自が個性的なミニチュア楽器を仕上げていました。クラフト用紙を買って持ち帰られる方も多くいて、老若男女問わず大人気のワークショップでした。
通奏低音初歩講座（10日15:10-16:00）は、渡邊温子氏によって、初めに通奏低音とは何か、通奏低音が使われた時代について解説され、続いて通奏低音奏者がアンサンブルの中で果たす役割、数字付低音の数字が何を表すかなどについて説明されました。ここでは、同じ「ド（c）」の音に付けられた10種類の数字（ハーモニー）の例を、実際のチェンバロの音で続けて聴いてもらう試みや、実践的な練習方法の紹介などがありました。最後に、作曲法の規則が学べる「パズル」を参加者に解いてもらい、講座が締めくくられました。（X）

なお、今回Cホールには、加屋野木山氏製作の分割鍵盤チェンバロが展示されており、来場者はそれぞれ興味深そうに見入ったり、試奏したりしていました。「分かれたシャープキーはそれぞれ何の音なのか」と熱心に質問する方や、中には「この楽器を弾けただけでも入館料を払った甲斐がありました」と言って帰られる方もいらっしゃいました。　（X）

5/9,10　レセプションルーム

エントランスを抜けてすぐ左手に位置するこの部屋は、ドアをくぐるとまず目に入るのは美しい裏庭の木々の緑。裏庭側に一面の窓のある明るく開放的なこの部屋には、柴田雄康氏製作のフレミッシュ二段鍵盤が２台。新緑の中に落ち着いた色合いの柴田氏の楽器が良く似合います。

この２台の楽器は特別講座に使用しましたが、それ以外の時間帯はボランティアの学生会員がデモンストレーション演奏をしてくれました。初めてチェンバロを見る方、チェンバロ演奏の愛好家の皆様が熱心に話しこんでいる光景が見られました。このように、楽器に触れながら未来のチェンバリストと話しこめるのもチェンバロの日！ならではの楽しみです。

物販コーナーも充実しており、輸入CD販売のユニバーサル株式会社様はこの日のためにチョイスしたレアなCDをお持ちくださり、輸入楽譜のアカデミア・ミュージック様は古楽ファンなら読んでおきたい書籍、なかなか手に入りにくい古楽の楽譜からチェンバロ現代曲の楽譜までとの豊富な取り揃えで、大量購入されるお客様もちらほら見受けられました。

日本チェンバロ協会からは出演者、正会員のCD、講師の著書などチェンバロ演奏の糧となる品々、また、ささやかながら収益を活動資金の賛助金とさせていただくチェンバロ柄の小物などをご用意いたしました。

1日目は特別講座準備のためお客様にご覧いただく時間帯がなかなかないなど不手際はございましたが、2日目は皆様の笑顔や会話にあふれた、活気のある展示室となりました。ご来場いただきました皆様、ありがとうございました。また来年、お会いできることを楽しみにしております。　（N.T）

（古楽情報誌「アントレ」2015年9月号に掲載された記事を、編集部の許可をいただいた上で再掲載いたしました。）

そして、来年の「チェンバロの日！」の予定も決定しました！
生誕400年を迎えるヨハン・ヤーコプ・フローベルガー
（1616-1667）　に光を当てます。
レクチャー、コンサートなどなど楽しい催しを企画中です。
皆様とお会いできることを、心より楽しみにしております。

チェンバロの日！2016
日時：2016年5月14日（土）15日（日）
会場：東京・世田谷　松本記念音楽迎賓館

例会報告

第 14 回　特別例会「久保田慶一氏翻訳『記譜法の歴史』刊行記念講演会」

第 14 回例会は、8月 28 日（金）代々木の青少年オリンピック・センターで催されました。この例会は、４月に当協会の会長に就任された久保田慶一氏の訳書出版を記念し、ルネサンスからバロック・古典派にかけての記譜法を学ぶ目的で開かれました。また、初めてイタリア古楽協会との共催がなった点でも、大きな意味を持つものでした。当協会から 33 名、イタリア古楽協会から 29 名、そして一般の方々の参加も予想をはるかに上回り、レジュメの追加コピーに走った受付担当者から嬉しい悲鳴が上がりました。開催にあたっては春秋社の片桐文子さん（会員）、また共催に関して桑形亜樹子さん（運営委員）から格別のお力添えがあったことを申し添えます。当日も春秋社から高梨公明氏はじめお二方が駆けつけ、会場の一角は専門書の即売会とは思えない賑わいを見せました。末尾ながら、CD 機器の操作を一手に引き受けて下さったリコーダー奏者の吉澤実さん、ありがとうございました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。　（坂田理）

久保田慶一先生（訳）、K.パウルスマイヤー『記譜法の歴史　モンテヴェルディからベートーヴェンへ』セミナー

17世紀記譜法。古楽を演奏する人は誰でも、17世紀イタリア音楽に憧れと喜びを見つけた日の感動という炎を、各々の胸に揺らめかせていることでしょう。

東京での学生時代に聞いたイル・ジャルディーノ・アルモニコのCD「ViaggioMusicale」やR.ブースビーのモンテヴェルディ「オルフェオ」のオペラシティでの公演は私のハートを射止めました。丁度東京芸大には古楽科もでき、リコーダーの友人達と、図書館でファクシミリを見つけ、四苦八苦して音を出していた頃が懐かしいです。僅か10数年前のことですが、まだインターネットも発展途中で、楽譜は探すのに一苦労、生の音源はあっても、その演奏している楽器までは想像の世界でしかなかった時代です。

その後私はパリに渡ったのですが、その音楽院でコルネットの名奏者、ジャン・チュベリー先生（上記CDの一曲目でのファンファーレを吹かれています）とその門下生に出会い、17世紀イタリア音楽三昧の４年間を過ごしました。毎月教則本をファクシミリで読み、先生が次にコンサートで演奏したりCDに録音される、まだ出版されていない自筆譜を音出しするワークショップにはワクワクさせられました。特にスコアはまだないこの時代の曲をパート譜だけ渡されるB.C.（その上、一切数字が書かれていない通奏低音パート）のチンプンカンプン加減さには、お手上げです。なぜパリで？と不思議に思われるかもしれませんが、あの誇り高きフランス人でさえ、常に創造の根源であるイタリアには尊敬の念を持ち、現代もパリの音楽界では、イタリア人演奏家が、「イタリア人」というブランドと、超絶な技術、そして巧みな話術によって君臨しています。

実は、私はこんなに恵まれた環境にいたのにも関わらず、教則本を何度イタリア語で読んでも、フランス語や日本語でも丁寧に何度も説明を受けても、優秀で凄腕の同僚に引っ張って頂いたお陰で、通奏低音パートを「これ、幸せ！」と弾くことができました。確かに旋律楽器ではないので、帳尻を合わせてしまいます。テンポリレーションも演奏家によって様々。楽譜とはエスティメイトだけど、もうそろそろ確信が欲しい。。。

セミナー当日。会場には溢れんばかりのお客様が集まっていらして、この本がどれだけ待望されていたかわかります。

バーゼルのスコラカントルムの教科書のために書かれたということで、目次を見ると、知りたかった項目がずらり。それに譜例もたくさんあり、一人で読めそう！と思いましたが、数ページでギブアップ。日本語で読めても、中身は私には簡単ではありません。

久保田慶一先生は、この日特別に「チェンバロ協会」員のためでしょうか、鍵盤音楽を２曲取り上げて下さり、わかりやすく解説、またワークを付けて頂きながら、皆で本を読み進みました。

１曲目は、G.フレスコバルディの「第９トッカータ」。まずワークにて、すべての拍子（プロポルツィオ）記号を○で囲む。その後、本のテンポについての箇所を読み、久保田先生の解説。さらにバロック時代と100年後のテンポ、拍子記号、速度記号との比較。最後に参考音源を聞く。

２曲目は、G.ムファット「オルガニストのための曲集より　第11トッカータ」。フレスコバルディより70年後の作品。同じように作業をします。

最後に１曲目からどう変化しているのか比較、説明。
そして、この本の一番の要、「第１次分割段階と第2次分割段階におけるプロポルツィオ』の表と、15世紀から18世紀の記譜法の流れを確認しました。

これだけわかりやすく、丁寧に説明して頂けると、すっと頭に入りました。今まで弾いてみた曲のファクシミリをもう一度出し、拍子記号すべてを確認したくなりました。この一回きりではなく、通年、あるいはあと数回、この講座が続いてくださると、身体に覚えさせることができるでしょう。

今まで習っていたことが、もしかすると、ここ数年の研究や演奏からの発見によって、違っているかもしれません。実際、ワーク中に曖昧だったことがはっきり認識できました。しかしその参考資料の音源（上記理論に基づく）が実際そのように演奏されていたのか？という疑問も少し残りつつ。

日本語で手元にいつもあるのはとても有り難い一冊です。これからも何度も何度も読んでいくことと思います。素晴らしいセミナーを企画して頂きありがとうございました。　（野澤知子）

第 15 回　関西例会「17 世紀イタリア通奏低音入門」

９月12日16時-18時　奈良市法蓮町「佐保山茶論」にて

当初この日に台風が関西直撃との予報が出され、一時は開催が心配されましたが運良く好天に恵まれました。会場は大伴家持に所縁のある佐保の個人宅サロンで、クラシックのコンサートも数多く行われています。

久しぶりの関西例会は「17 世紀イタリア通奏低音入門」として、ロドヴィコ・ヴィアダーナの「100 の教会コンチェルト集」の序文を中心に行いました。
少々専門的すぎるテーマかとの心配は全く無用でした。定員 20 名と考えていたのが 35 名の事前申し込みがあり、会場の広さから考えて満席，キャンセル待ちのご案内を協会の HP に載せる程でした。当日更に飛び込み参加が２名有り、椅子をステージの上まで並べる事になりました。
参加者は関西会員が 10 名、その他リコーダー、ガンバ、オルガン、音楽学専攻の方の他アマチュアや学生の方もいらっしゃいました。

前半にヴィアダーナの「12 の奏者への提言」、その他 17 世紀イタリアの通奏低音に関する重要な教則本（アガッツァーリ、ビアンチァルディ、バンキエリなど）の紹介、後半はヴィアダーナの曲を使って具体的にどのように低音を実施するかを皆鉛筆を持って一緒に考える時間としました。

17 世紀イタリアの完璧な実施例の出版譜であるルッツァスキのカデンツ、対位法的処理なども見て頂きましたが、この楽譜を初めて目にする方も多かったようです。

短い時間でしたが、当時の教則本を読む時の心構え、何故低音のパート譜だけで数字がなくても必然的に付ける音が決まってくるのか、などなど基礎的な事項をお伝え出来たと思います。17 世紀の通奏低音は苦手、という方には勉強の方法の糸口を掴んで頂けたのではないでしょうか。
このような関西でのセミナー、ワークショップが関西の会員さんの手で開かれる事を強く望みながら帰路に着きました。　（桒形亜樹子）

「17世紀前半イタリア通奏低音入門に参加して」

通奏低音というとまず数字つき低音が読めることを求めてしまいがちです。しかし、17世紀前半イタリアにおける通奏低音を知ることで、世界はもっと広がるということが分かりました。「対位法を勉強しないかぎり通奏低音はできない。対位法によって和声が生まれる。」と来形さんはおっしゃいました。そして、パンチばかりではなく具体的な練習方法も示して下さいました。
通奏低音：指と脳のために3大必修楽譜として
ルッツァスキ：マドリガーレ集（1601年ローマ）
シャイト：ゲルリッツァー・オルガン・コラール集（1650）
C.P.E.バッハ編：J.S.バッハの４声コラール集（1765-1787年）

これらを弾いて分析し暗譜すること、目標は内声で対位法ができること。最後に来形さん自身の目標としてA.スカルラッティが自作のカンタータに通奏低音のリアリゼーションを施したものを弾いて下さいました。うーむ、ハードルは高いけれどがんばるぞ！と思った一日でした。（山名朋子）

例会予告

第17回例会「ピーター・ヤン・ベルダー氏マスタークラス＆コンサート」

オランダを中心に鍵盤、リコーダー奏者として世界的に幅広く活動しているベルダー氏の来日に際し、招聘元のムジカテミスのご協力の下、以下のイベントを開催致します。ふるってのご参加をお待ちしております。

2015年11月24日（火）
13時～マスタークラス
19時～20時ベルダー氏コンサート

場所：古楽研究会 Space1F http://www.space1f.com
（東京メトロ有楽町線・副都心線　要町駅徒歩9分）

１）マスタークラス
ソロ及び室内楽の公開レッスン形式、英語からの通訳付き。
・１組60分で４～５組を募集致します。
先着順となりますのでお申し込みはお早めにお願い致します。
・室内楽は１グループ２～３名とします（４名以上は要相談）。

課題曲：
スヴェーリンク、デュフリの鍵盤ソロ作品。他の作品を希望の場合は講師と相談致します。
室内楽の課題は特に設けません。

受講者レヴェル：
チェンバロを専門に勉強している学生、演奏家
（会員以外の方は簡単な履歴をお知らせ下さい）

受講料（コンサート入場料含）
ソロ　会員10,000円／一般12,000円
アンサンブル１組　会員(チェンバリストが会員)13,000円
一般15,000円
聴講料：会員3,000円／一般3,500円

申込み締切り：10月末日
お申込み/ お問合せ：**日本チェンバロ協会例会係**
cembalo_events@yahoo.co.jp

２）ベルダー氏コンサート／19～20時

曲目：スヴェーリンク、デュフリの作品他
（賛助出演　バロック・ヴァイオリン　木村理恵）
入場料A（コンサートのみ）会員2,000円／一般2,500円
入場料B（マスタークラス聴講+コンサート）会員4,000円
一般5,000円

お申込み/ お問合せ：**日本チェンバロ協会例会係**
cembalo_events@yahoo.co.jp
主催：日本チェンバロ協会　協力：一般社団法人ムジカテミス

ピーター・ヤン・ベルダー

デン・ハーグ王立音楽院リコーダー科、アムステルダム音楽院チェンバロ科卒業。
リコーダーをリカルド・カンジ氏に、チェンバロをボブ・ファン・アスペレン氏に師事。
チェンバリスト、クラヴィコード奏者、オルガニスト、フォルテピアノ奏者、さらにリコーダー奏者として国際的に演奏活動を行う。
これまでにユトレヒト古楽音楽祭、ベルリン音楽祭、ブレーメン音楽祭、ライプツィヒ・バッハ音楽祭、ポツダム音楽祭など多くの音楽祭に出演。ソリストとしての定期リサイタルのほか、通奏低音奏者としてヨハネット・ゾマー、シギスヴァルト・クイケン、ヴィルバート・ハゼルゼット、ニコ・ファン・ダー・メールの各氏などと共演する。フランス・ブリュッヘン氏率いる18世紀オーケストラや、オランダバッハ協会管弦楽団、コレギウム・ヴォカーレ・ゲント、ジェズワルド・コンソート・アムステルダム、バッハ・コレギウム ・ジャパン、オランダ・ラジオ交響楽団などの演奏会、録音に参加する一方、自身の率いるアンサンブル、ムジカ・アンフィオン(Musica Amphion)では指揮者を務め、2005年アムステルダムコンセルトヘボウでのデビューを皮切りに、歌手のマイケル・チャンス、サラ・コノリーの各氏らを招き定期的に公演を重ねる。
1997年ハンブルグ・NDR・チェンバロ・コンクール第3 位、
2000年ライプツィヒ・バッハ・コンクールチェンバロ部門第1位受賞。
これまでにスカルラッティ全集やバッハの平均律曲集、ラモーやソレールの全集など125枚以上のCDをリリース。

※ベルダー氏の他のコンサートはバロック・ヴァイオリン木村理恵氏との共演で以下3回開催されます。

11月23日（月祝）15時　栃木市西方音楽館

11月26日（木）11時半／14時の２回　旧古河庭園洋館
（北とぴあ音楽祭）コレッリ、ルクレール、バッハ、ソレール等の作品

お問合せ：一般社団法人ムジカテミス　http://ms-tms.com/

2014 年度　収支決算

（2014.4/1～2015.3/31）

収入の部		支出の部	
正会員年会費	438,000	会報刊行費	60,688
正会員学生年会費	19,500	通信・郵送費	34,858
一般会員年会費	88,500	コピー・印刷費	20,735
法人・団体会員年会費	44,166	消耗品	3,346
賛助金	25,250	雑費	3,000
雑収入	7,070	会議費	22,405
例会・催し物収入	1,079,766	事務所費	10,500
当期収入合計(A)	1,702,252	選挙費	42,125
前年度繰越(B)	958,388	例会・催し物支出	1,005,564
総計(C=A+B)	2,660,640	当期支出合計(D)	1,203,221
		次年度繰越(E=C-D)	1,457,419
		総計(D+E)	2,660,640

事務局からのお知らせ

●会費のお支払いをお忘れなく！…２ヵ年度にわたり会費のお支払いが確認できない方は、規約に基づき、退会されたものとみなしますので、あらかじめご了承ください。（会計）

●メールアドレスを変更された方はご連絡を！…最新のメールマガジン（9月12日付第42号）を受信できていらっしゃらない方はご連絡ください。
お支払い状況のお問い合わせ、メールアドレス変更のご連絡は、事務局 japan.harpsichord.society.jp@gmail.com までお願い致します。（事務局）

●「チェンバロの日！」の雰囲気を少しでもお伝えできればと思い、ダイジェスト等を動画として公開しております。
パソコンやスマートフォンで、以下の手順でご覧いただけます。
検索「チェンバロ協会」→「チェンバロ協会ホームページ」→メニュー「動画」→「チェンバロの日！2015 ダイジェスト」
この他にも、例会や講座などの動画を公開しております。会員専用の動画もありますので、どうぞ御活用下さい。（広報）

スマートフォンの方は
右の QR コードを読み取るだけで
簡単にお楽しみいただけます！

チェンバロの日！2015
ダイジェスト
2分 53 秒

チェンバロの日！2015
催し物ダイジェスト
3分 28 秒

楽器ガイドツアー
52 分 34 秒

広報も筆の誤り

▼今思いますてぇと、**バッハ**が「音楽の父」などと信じていられた頃はよござんした。チェンバロやら古楽なんぞに携わるてぇと、バッハ以前のアマタの作曲家と出会うことになり、ならば彼等は「音楽の祖祖祖父」か、などとトチるやら舌を噛むやら。
▼中にはユニークなお名前の方々もいらして、これがまた覚え易いようで、かえって混乱してしまうのでございます。
▼**ペープシュ**などは、花粉の季節を彷彿とさせて何やらムズムズして参りますし、**ビーバー**なんぞは、曲よりもダムを作ってんじゃないかと訝しんだり、はたまた客室乗務員がみんな白いカツラをつけてそうな航空会社**エアバッハ**。
▼友人のチェンバリスト嬢は、ゴキブリが出現した時、思わず旦那さまに「なんで**バルサンティー**しなかったのよ！」と叫んでしまったとか。するてぇと、すかさず旦那さまは「ホイホイより**オトッテール**からさ」なぁんて切り返したとかしなかったとか。
▼迂闊にプログラムを組むてぇと、「カッチカチ（**カッチーニ**）に、あがっちゃって（**アガッツァーリ**）、大ボケ（**ボッケリーニ**）こいちまったぜ」などと、責任を作曲家に転嫁するけしからん輩も出て来ないとも限りません。
▼そんな中にあっても、リコーダーを学ぶ学生達はさすがでございます。自分達のレパートリーを、文明堂の CM 音楽に合わせて「**カステロ**１番、**フォンタナ**２番、**サンマルティーニ**は良く知らない」などと口ずさんでるというから、なんて利口だ…
▼かように次々とヘンテコな名前が出て参りましたが、それもそのはず。なんてったって「音楽の母」は“**変出る**”ですから…

会報第５号　2015年11月10日発行　発行人：久保田慶一
編集：及川れいね、加屋野木山、高橋ナツコ、山縣万里
運営委員会：大塚直哉

日本チェンバロ協会
Japan Harpsichord Society

日本チェンバロ協会事務局
住所：〒170-0002 東京都豊島区巣鴨１丁目 44-4　１階
電話：080-9661-8196（火曜日 10 時～17 時に対応）
メール：japan.harpsichord.society@gmail.com
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ：http://japanharpsichordsociety.jimdo.com